

エルサレム入城

ルカ福音書19:28-40 (新改訳2017訳)

19:28 これらのことを話してから、イエスはさらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。
 19:29 オリーブという山のふもととベテパゲとベタニアに近づいたとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。
 19:30 「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、連れて来なさい。
 19:31 もし『どうして、ほどこくのか』とだれかが尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」
 19:32 使いに出された二人が行って見ると、イエスが言われたとおりであった。
 19:33 彼らが子ろばをほどこいていると、持ち主たちが、「どうして、子ろばをほどこくのか」と彼らに言った。
 19:34 弟子たちは、「主がお入り用なのです」と言った。
 19:35 二人はその子ろばをイエスのもとに連れて来た。そして、その上に自分たちの上着を掛けて、イエスをお乗せした。
 19:36 イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。
 19:37 イエスがいよいよオリーブ山の下りにさしかかると、大勢の弟子たちはみな、自分たちが見たすべての力あるわざについて、喜びのあまりに大声で神を賛美し始めて、
 19:38 こう言った。「祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。」
 19:39 するとパリサイ人のうちの何人かが、群衆の中からイエスに向かって、「先生、あなたの弟子たちを叱ってください」と言った。
 19:40 イエスは答えられた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。」

【祈りながら考えよう】

- (1) 二人の弟子を遣わされたのは何のためですか。十字架に掛かる日の何日前の出来事ですか。
- (2) イエス様は軍馬ではなく、だれも乗ったことのない「ろばの子」に乗られたのはなぜですか。
- (3) 大勢の弟子たちはなぜ「地には平和」ではなく「天には平和があるように」と賛美したのですか。

【解説】

(1) 一行の先頭に立って行かれた

《これらのことを話してから、イエスはさらに進んで、エルサレムへと上って行かれた。》

いよいよ「受難週」にやって来た。「しゅろの日曜日」と呼んでいる日の出来事である。ルカ福音書にはそのことは書かれていないが、他の福音書では人々が木の枝を切って来て、それを道に敷いたと記されていて、それが「しゅろの木」であったと言われているところから、そう呼ばれている。

主イエスは、エルサレムが近づいて来ると、一行の先頭に立って行かれた。これは、これからということがご自身の身の上にかかるのかということをご存知で、その使命遂行のために率先される姿を示している。主イエスの地上生活は一貫して、私たちの罪を背負って十字架上で死なれ、私たちを救う使命に貫かれていた。

(2) 二人の弟子を遣わされた

《オリーブという山のふもととベテパゲとベタニアに近づいたとき、イエスはこう言って、二人の弟子を遣わされた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばが、つながれているのに気がつくでしょう。それをほどこいて、連れて来なさい。もし『どうして、ほどこくのか』とだれかが尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。》

使いに出された二人が行って見ると、イエスが言われたとおりであった。彼らが子ろばをほどこいていると、持ち主たちが、「どうして、子ろばをほどこくのか」と彼らに言った。弟子たちは、「主がお入り用なのです」と言った。》

主イエスは、オリーブ山のふもとにあるベテパゲとベタニアに近づかれると、二人の弟子を遣わして、エルサレム入城の準備をさせておられる。真向かいの村には、「まだだれも乗ったことのない子ろばの子」が繋がれているので、そ

れを解いて、連れて来るようにということであった。



エルサレム入城の経路

①まだだれも乗ったことのない子ろば

「まだだれも乗ったことのない子ろばの子」という言い方には、深い意味がある。聖書では、聖いお方のために供する物は、人間が使ったものであってはならなかった。このまだだれも乗ったことのない子ろばの子にお乗りになる方は、聖い神の御子であるということの意味している。

②主がお入り用なのです

ところで、二人の弟子たちが繋がれている「子ろばの子」を見つけ、それを解いて連れて行こうとしたところ、だれかが「どうして、子ろばをほどこくのか」と言ったら、「主がお入り用なのです」と言えば、すぐ許してもらえると、主イエスは言われた。マルコ11章3節では「もしだれかが、『なぜそんなことをするのか』と言ったら、『主がお入り用なのです。すぐに、またここにお返しします』と言いなさい。」と言葉がつけ加えられている。

弟子たちが自分たちに命じられたことを、持ち主たちに説明した後、持ち主たちは「子ろばの子」をイエスに用いていただくことと喜んで解放したようである。この持ち主たちは以前に、主の働きを通して、すでに何かの祝福にあずかっていたのかもしれない。それゆえ、主が必要な時にはいつでも協力する、とすでに申し出ていたのかもしれない。

③平和の王として入城される

主イエスがエルサレム入城された時、馬にはなくろばの子に乗られた。これは、主イエスが凱旋将軍のように軍人として入城されたのではなく、「平和の王」として入城されたということは、旧約聖書のゼカリヤ書の預言9章9-10節の成就である。これは救い主についての預言であったから、弟子たちは歓迎して迎えた。

「娘シオンよ、大いに喜び。娘エルサレムよ、喜び叫べ。見よ、あなたの王があなたのところに来る。義なる者で、勝利を得、柔和な者で、ろばに乗って。雌ろばの子である、ろばに乗って。わたしは戦車をエフライムから、軍馬をエルサレムから絶えさせる。戦いの弓も絶たれる。彼は諸国の民に平和を告げ、その支配は海から海へ、大河から地の果てに至る」(ゼカリヤ9:9-10)

平和の王である。その平和は、私たちの罪の身代わりとして死なれることによって、私たちが罪から解放して与えてくださるものである。

群衆が考えていたような、ローマの権力を打ち倒して、エルサレムに神の国を建てる、そういう地上的な王ではない。

(2) 主のために鞍をこしらえた

《二人はその子ろばをイエスのもとに連れて来た。そして、その上に自分たちの上着を掛けて、イエスをお乗せした。》

イエスが進んで行かれると、人々は道に自分たちの上着を敷いた。イエスがいよいよオリーブ山の下りにさしかかると、大勢の弟子たちはみな、自分たちが見たすべての力あるわざについて、喜びのあまりに大声で神を賛美し始めて、こう言った。「祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように。》

弟子たちは《自分たちの上着》で主のために「鞍」をこしらえた。主がオリーブ山の西側のふもとからエルサレムに上



って行かれると、多くの人々が《道に自分たちの上着を》広げた。王の即位を喜び、賛美している。

イエスに従う者たちは、主がなさった様々な《力あるわざ》を自分たちが見たことで、大声で一斉に《賛美》し始めた。「祝福あれ、主の御名によって来られる方、王に。天には平和があるように。栄光がいと高き所にあるように」

この賛美と、主イエスがご降誕になった時に、天の御使いたちが歌った賛美と比べてみて、少し違っている表現があることに気づかされる。御使いたちの賛美では、「地の上で、平和があるように」(ルカ2:14)であったが、このたびの弟子たちの賛美では、「天には平和があるように」なのである。この違いはなぜか。

「平和の君」がすでに拒まれ、まもなく殺されようとしていたのだから、地に平和などあり得なかった。しかし、キリストが間もなくカルバリの十字架で死なれ、天に昇られたなら、天には平和があったことだろう。揺るぎない平和である。その平和がやがてこの地上にも行われる時が来る。再臨の時である。

弟子たちがこの時歌ったのは、主イエスこそ救い主であるという告白であると言えないこともない。しかし、この時、弟子たちがどれほどそのことを自覚して歌っていたかどうかはよくわからない。

(3) この人たちが黙れば石が叫びます

《するとパリサイ人のうちの何人かが、群衆の中からイエスに向かって、「先生、あなたの弟子たちを叱ってください」と言った。イエスは答えられた。「わたしは、あなたがたに言います。もしこの人たちが黙れば、石が叫びます。》

イエスがこのように公の場で榮譽を受けておられたので、《パリサイ人》たちは憤慨し、「《弟子たち》を叱るべきだ」と主に告げた。しかし、イエスは、人々がこれほど歓呼するのも当然のことだとお答えになった。《もし》弟子たちがそうしなければ、《石》がそうするだろうと。主はこのようにパリサイ人たちを叱責された。彼らが、いのちのない石よりもかたくなで無反応だったからである。

イスラエル旅行記(第8回)

イスラエル旅行の前から、是非見たい、調べたい、と心待ちにしていたのはエルサレムである。特に、主が十字架につけられた場所をこの目で確認したかった。

エルサレムへ入城

オリブ山でエルサレムの全景を見た後、ゲッセマネの園とその傍にある「万国国民の教会堂」に入った。その教会名が「万国国民の」と名付けられたのは、「イエス・キリストは一部の人や一部の国民のためではなく、すべての人のため、万国国民のために死なれたからである」とガイドのルツさんから説明を受けた。あらためて、万民のための主イエス・キリストの死の尊さ、偉大さ、ありがたさを思う。

私たちを乗せたバスは、オリブ山を下り、ケデロン谷の谷を通過してエルサレムの城壁を目指して上る。いよいよ城壁の内側に入る。「嘆きの壁」に最も近い門から入城する。

嘆きの壁で

その門の内側は広場で、バス乗場となっている。右手の「嘆きの壁」を見ると、多くのユダヤ教徒たちが声を出して祈っている。

「嘆きの壁」の向こうには黄金の屋根「岩のドーム」の丸屋根が輝いて見える。イスラム教の大寺院だ。かつてはユダヤ教の神殿が建っていたところ。紀元70年にローマ軍によって崩壊させられた。その時に部分的に残ったのが神殿を囲むこの西側の外壁、「嘆きの壁」なのだ。

神殿崩壊後、ユダヤ人はここに集まり、神殿の再建とメシアの来臨を断食しながら祈っている。また、イスラエルでは、男の子が13歳になると、バル・ミツバ(律法の子)という成人の祝いをする。その男の子は、人々の前で律法の巻物を読み、この日から、シナゴグ(ユダヤ教の礼拝堂)の礼拝の正式な構成員と認められ、大人の責任を自覚する生活にはいる。その成人式の祝いをしているグループが幾組も見られた。



嘆きの壁で(左上に黄金のドーム)

見よ、この人だ

「嘆きの壁」の見学を終えて、いよいよ十字架の苦難の場所へ近づく。もう一つ内側の門をくぐると、そこはアラブ人の土産物屋やカフェが並ぶ狭い路地である。雑踏の路地をいくつも通り抜けて、ようやくエック・ホモ教会堂に着く。エック・ホモとはラテン語で「見よ、この人だ」(ヨハネ19:5)の意味である。

そこでピラトは、イエスを捕え、むちで打たせた。兵卒たちは、いばらで冠をあんで、イエスの頭にかぶらせ、紫の上着を着せ、それから、その前に進み出て、「ユダヤ人の王、ばんざい」と言った。そして平手でイエスを打ちつけた。するとピラトは、また出て行ってユダヤ人たちに言った、「見よ、わたしはこの人をあなたがたの前に引き出すが、それはこの人になんの罪も見いだせないことを、あなたがたに知ってもらうためである」。イエスはいばらの冠をかぶり、紫の上着を着たまま外へ出られると、ピラトは彼らに言った、「見よ、この人だ」。(ヨハネ19:1-5)

小さな入口に入って、階段を上ったり下ったり、迷路のような通路を通過して地下に行くと、二千年前の敷石がそのまま残されていて、その敷石に刻まれたローマ兵のゲーム跡というのを見る。

二千年前、このあたりは神殿の北側に接する「アントニアの要塞」があり、そこはローマ軍の駐屯本部であった。

主がここでローマの総督ピラトの下で裁判を受け、むち打たれた場所、ガバダ(敷石)である。

「そこでピラトは、これらの言葉を聞いたとき、イエスを外に引き出し、敷石(ヘブル語ではガバダ)と呼ばれる場所で、裁判の席に着いた。」(ヨハネ19:13)

ヴィア・ドロローサ(悲しみの道)を歩く

フランスシスコ会の人たちは、主が死刑判決を受けたこの場所を起点とし十字架につけられた地点・ゴルゴタまでの約1kmほどの道をヴィア・ドロローサ(Via Dolorosa, ラテン語で悲しみの道)と呼んでいる。

そこに14の地点(聖書記事にあるもの、ないものを含めて)を設定している。毎週金曜日には修道士たちが十字架を担ぎながら行進し、それぞれの地点で主イエスの身に起こった事柄に関する祈禱文を読む。カトリックの巡礼者たちも賛美歌を合唱しながら続き、イエスの歩んだ道をたどる。それぞれの地点に、建物の壁のやや高いところに浅浮彫りの像や文字でマークがされている。

私たちもその道を歩いた。この道は当時も今も繁華街で、ある場所は喧騒な商店街であり、ある場所は両側を石の建物で挟まれて谷底のようなどころである。

二千年前も、このような雑踏の中を十字架を負いつつ、主は引き回されたのであろう。主が大勢の民衆の目にさらされ、あざけられたことを思うと胸が熱くなる。

一点一点確認しつつ、主が侮られ辱められたその通りで、十字架の苦しみを偲び、主に感謝の祈りをする。

受難週における順序

日曜日 しゅろの日曜日、エルサレムに入城、エルサレムを見て泣く(ルカ19:41-44)

月曜日 いちじくの木を枯らす、宮きよめ、盲人や足なえのいやし(マタイ21:14)

火曜日 (宮における最後の日)

- どんなことでも祈れとの教え
- サンヘドリンによるイエスの権威に対する挑戦
- 2人の息子のたとえ(マタイ21:28-32)
- ぶどう園のたとえ
- 婚宴のたとえ(マタイ22:1-14)
- カイザルへの税金についての質問
- 復活についての質問
- どの戒めが一番大切ですか
- キリストはどうしてダビデの子であろうか
- ギリシャ人がイエスに会うことを願う(ヨハネ12:20-22)
- 学者、パリサイ人への激しい非難(マタイ23:13-36)
- やもめのわずかな献金
- 宮からの最終的な退去
- オリブ山での偉大な説教:
 - ・ すなわちエルサレムの滅亡と再臨
 - ・ 10人の娘とタラントのたとえ(マタイ25:1-30)
 - ・ 最後の審判の場面(マタイ25:31-46)
- ユダと祭司たちとの取引(翌日?)

水曜日 ベタニアにおける静かな日(香油を注がれる)

木曜日 夕方: 最後の晩餐
夜: ゲッセマネにおける苦悶、裏切りと捕縛
ペテロの否認

金曜日 裁判(ユダヤ人議会とローマ総督ピラトの前)と十字架刑、埋葬



土曜日 安息日

日曜日 イエスが死人の中からよみがえられた

第10地点から第14地点は、「^{せいふん ぼきょうかい}聖墳墓教会」と呼ばれる教会堂の内部に設置されている。「^{せいふん ぼきょうかい}聖墳墓教会」内部の装飾はあまりにもきらびやかな装飾で、聖書の記録のイメージとはあまりにもかけ離れている。これは期待はずれであった。たしかに二千年も経っているのだから、当時の保存状態を期待する方が無理なのだ。

「人はみな草のようで、その栄えは、みな草の花のようだ。草はしおれ、花は散る。しかし、主のことは、とこしえに変わることがない。」(Iペテロ1:24-25)。

多くの遺跡も、いつかは、草のようにしおれ散ってしまうだろう。しかし、いつまでも変わることのないものがある。主の御言葉だ。あらためて聖書の尊さを思う。

この後、嬉しいことに、二千年前のエルサレムの模型を見学することができた。縮尺50分の1のもので、西暦66年、ローマ軍に破壊される直前のエルサレムを再現した模型である。

建設材料には、当時使われたものが用いられ、地形も限りなく本物に近いものだという。それによって主が十字架に架けられたとされる場所をイメージすることができた。「カルバリやまの十字架」が賛美となって出てくる。

(2000年3月イスラエル旅行記／福島勲)

ヴィア・ドロローサ (悲しみの道)

- ・第1地点：ピラトの官邸。イエス、十字架刑を宣告される。ピラトが大祭司や民衆の圧力に負けて死刑を宣告する。
- ・第2地点：イエス、鞭を打たれ、いばらの冠をかぶせられ、紫の衣を着せられ辱められる。十字架を背負って歩き始める。
- ・第3地点：イエス、十字架の重みに倒れる。
- ・第4地点：母マリヤ、十字架を負う主に会う。以前預言者シメオンがマリヤに言った「剣があなたの心さえも刺し貫く」が成就された。
- ・第5地点：クレネ人シモンが、イエスに代わって十字架を背負わされる。
- ・第6地点：ペロニカという女性がイエスの顔を拭う。
- ・第7地点：イエス、二度目に倒れる。イエスの傷の痛みは更に強まる。
- ・第8地点：イエス、悲しむ女たちを慰める。「エルサレムの娘たち。わたしのことで泣いてはいけない。…」
- ・第9地点：イエス、三度目に倒れる。
- ・第10地点：イエス、上着を脱がされる。
- ・第11地点：イエス、十字架につけられる。
- ・第12地点：十字架が立てられる。イエス、十字架上で息を引き取る。
- ・第13地点：アリマタヤのヨセフ、イエスの遺体を引き取る。
- ・第14地点：イエス、埋葬される。

カルバリやまの十字架につきて
 イエスは尊き血潮を流し
 救いの道を開きたまえり
 カルバリの十字架 わがためなり
 ああ 十字架 ああ 十字架
 カルバリの十字架 わがためなり
 (聖歌399番)



第3地点の曲り角



二千年前のエルサレムの模型(中心付近がゴルゴタの伝統的位置)